# コレ・ソレ・アレの使用実態から捉える
# 対面会話の話しことばと携帯メール・LINEの「打ちことば」

落　合　哉　人

## 1．はじめに

近年の日本語研究では、インターネットを介したコミュニケーションで用いられることばを「打ちことば」と呼ぶことがある。田中（2014）はその特徴として、1）打つ者と読む者が「非同期・非対面」であること、2）「自己装い性や装飾性の高い要素が多く現れる」こと、3）文字を基調としつつも「話すように打つ」文体を持つこと、の3点を挙げている。本稿は、「打ちことば」の独自性を把握する際の足掛かりとして、A）そもそも日本語の音声発話ではどのような話しことばが話されてきたかという点と、B）「打ちことば」は、話しことばと具体的にどのように言語使用の特徴が重なるかという点を検討するものである。分析の対象として、2000年代に普及した最も中心的なインターネット・コミュニケーションの場である携帯メールと、その後継関係にある2010年代のLINEチャット（以下、LINE）及び、両者と同時期に収録された対面会話を取り上げ、特に指示詞コレ・ソレ・アレの現れ方の比較をもとに言語使用の実態を論じる。

本稿が以上の「打ちことば」及び話しことばを分析する上で特に指示詞を対象とする理由として一点目に、コ系指示詞（以下、コ）、ソ系指示詞（以下、ソ）、ア系指示詞（以下、ア）各形式の現れ方は、後述の通り、その発話を含むレジスター[1]全体の言語的特徴を反映しやすいと思われることが挙げられる。従ってそれらの出現傾向は、場面ごとの言語使用がどのような特徴を持つか把握する際、適切な指標となることが予測される。また、二点目に、携帯メール等に関する研究では従来、そこでのコミュニケーションで話しことばと類似の言語使用がなされることが盛んに言及されてきたが（佐竹，2005；三宅，2005等）、具体的に個々の語彙や形式が実際の談話でどのように現れるかという詳細な分析は不足してきたことが挙げられる。従って指示詞の使用のような、メディアを問わず見られる一般的な言語使用の差異の多くは見過ごされてきた可能性がある。

そこで本稿では、指示詞の中でも特に、コレ・ソレ・アレの3形式に着目し、対面会話・携帯メール・LINEにおける現れ方を詳細に分析する。以下、2節ではコ・ソ・アの出現傾向に関する先行研究を確認する。次に、3節では対面会話の観察をもとにコレ・ソレ・アレの用法分類を行い、用法ごとの出現傾向を示す。続いて4節では携帯メールとLINEにおけるコレ・ソレ・アレの出現傾向を分析する。5節はまとめである。

## 2．コ・ソ・アの出現傾向に関する先行研究

まず、議論に先立ち指示詞に関する先行研究を確認しておく。日本語の指示詞につい

ては従来、現場指示と文脈指示の２用法を中心に多くの文法記述があるが、ここでは特に、話しことばにおける用法の分類や出現傾向の調査を行う迫田（1998，2001）と石黒（2012）を取り上げる。

上記のうち迫田（1998）は、日本語学習者によるコ・ソ・アの習得順序に着目する研究であり、分析枠組みの構築を目的として、日本語母語話者の話しことばも観察している。同論は、日本語母語話者同士の対面会話10件（計300分）に現れたコ・ソ・アの用例の分析に基づき、「現場指示用法」「絶対指示用法」「単純照応用法」「ア系文脈指示用法」「ソ系文脈指示用法」「コ系文脈指示用法」「観念コミュニケーション・ストラテジー（CS）用法」の７用法を抽出しており（各用法の説明と用例は下記の通り）、特に成人同士の会話では、ア）ソ＞ア＞コの順に出現が多いことと、イ）「現場指示用法」と「絶対指示用法」を除く５用法のうち「ソ系文脈指示用法」が最も多く、次に「観念CS用法」と「ア系文脈指示用法」が多いこと、の２点を報告している。

○迫田（1998）におけるコ・ソ・アの用法分類

【現場指示用法】会話の中で現場の事物を指す用法

例）（ケーキを食べながら）このケーキだれが作ったん？

【絶対指示用法】手紙や電話等で話し手の絶対的な場所や時間を指す用法

例）（東京に居たけれど、）彼が勤めるのでこっち（広島）に帰って来た頃、私もこっち（広島）に帰った。

【単純照応用法】会話内容の指示対象と話し手・聞き手の関わりに関係なく、指す用法

例）これ全く関係ないんだけどねー、息子ったらこづかいもらうと全部使っちゃうのよねー。

【ア系文脈指示用法】話し手が聞き手との共有体験・知識を指す用法

例）SA：○○先生はお元気？　一緒に１年生をおしえてるんでしょ？
YO：ええ。あの先生は、元気すぎるくらい、元気ですよ。

【ソ系文脈指示用法】文脈中の指示対象を客観的に平静に指す用法

例）この前もねー、友達と酒飲んでてわしが昔の思い出を話しとったら、それをその友達が面白がってテープに取り出したんよー。

【コ系文脈指示用法】文脈中の指示対象を主観的に強烈に指す用法

例）弟や妹が出来た子供さんが急にぜんそくになる、これは結構ありますからねー。

【観念CS用法】観念の中にある知識や対象を指示したり、直接の言及を回避したりする時の方略となる用法

例）広島へ来るとやっぱりあれですよねー、牡蠣が食べたくなりますよねー。

（各用法の説明と用例は、同pp.97-101に拠る。）

また、迫田（1998）に後続する迫田（2001）は、第一言語習得の観点からコ・ソ・アの出現傾向を調べる研究であるが、比較対象としてやはり成人日本語母語話者の発話

に触れており、子供と話す母親の発話、日本語教師の授業、初対面の日本語母語話者同士の対面会話、の計３場面で「現場指示用法」を除く各用法の割合が異なることを明らかにしている（用法の基準が若干違うため、単純な比較はできないが、迫田（1998）が扱う成人同士の会話とは初対面会話の結果が最も近い）。

上記ふたつの研究が自然談話を扱う一方で、石黒（2012）は、実験的手法によってコ・ソ・アの出現傾向と発話場面の関係を検討している。同論は、対面会話・独話・作文の３種の環境と、記憶の深浅に対応する２種の話題（「かつて行った旅行の思い出」「直前に観た映画のストーリー」）を組み合わせた計６場面における日本語母語話者の発話を分析しており、特に話しことばに該当する対面会話では、ａ）アは共通の記憶を指示する際に多く現れること、ｂ）ソは専ら聞き手の先行発話に言及する際に現れること、ｃ）コは浅い記憶を指す際に現れやすいこと、の３点を報告している。また、独話では、ｄ）文脈指示のソが非常に多いことと、ｅ）対面会話と比べてアとコの出現頻度が著しく低いこと、の２点を指摘している。

以上のように先行研究からは、同じく成人日本語母語話者の発話でもレジスターによってコ・ソ・アの出現傾向が変わることがわかる。一方、このことは、コ・ソ・アの出現傾向が複数のレジスター間の共通点や相違点を探る際のひとつの指標となり得ることも示唆していると言えよう。

## ３．対面会話におけるコレ・ソレ・アレ

次に本節では、次節で「打ちことば」の実態を分析する際の参照点として、日本語母語話者同士の対面会話における話しことばを取り上げ、コ・ソ・アの談話上の用法分類と出現傾向を示す。前節で確認した通り、類似の試みは既に迫田（1998）等で行われているが、「現場指示用法」を中心として調査結果に不明な部分もあることから、本稿ではコーパスを対象として改めて調査を行うことにした。また、その際、位置付けが曖昧な用例が多く見られたため、分類の枠組み自体の修正をはかった。

なお、指示詞の出現傾向に関する研究では、コ・ソ・アがそれぞれ統一的に扱われることも多いが、本稿では特に、コレ・ソレ・アレの３形式に限定して出現を観察する。その理由として、指示詞の現れ方はコ・ソ・アの別に留まらず、同じ系列の形式間（たとえばコに含まれるコレ、コイツ、コノ等）でも被修飾要素の有無や出現文脈、さらには有する談話上の用法の点で様々であり、少なくとも量的な出現傾向を論じる際は、そのような形式ごとの性質次第で適切な議論の展開が変わり得るものと考えることが挙げられる。また、この点を踏まえ特にコレ・ソレ・アレに着目するのは、これらが被修飾要素を持たず（従って基本的に指示対象との関係だけ踏まえればよく）、人を指すコイツ等や場所を指すソコ等と比べても広範な文脈で現れることが予測されるためである。

### ３．１　対象とする対面会話のデータ

話しことばの観察にあたり、本稿では、『名大会話コーパス』（以下、NUCC）に含まれる対面会話８件（計296分／4567ターン[2]）と、『日本語日常会話コーパス（モニター

公開版)』(以下、CEJC)に含まれる対面会話７件(計162分／2747ターン)を扱う。NUCCは2001～2003年に収録された会話の書き起こしデータを収めるコーパスであり(藤村ら，2011)、CEJCは2016年以降に録音・録画された会話を収めるコーパスである(田中ら，2018；小磯ら，2019)。本稿では、両者のデータのうちⅠ)すべての参加者が10代後半～20代後半の東京方言話者かつ非初対面であること、Ⅱ)移動中や接客中ではないこと、Ⅲ)行事の運営会議等、会話のゴールが事前にあるものではないこと[3]、の３点を満たす会話をすべて対象とした。なお、参加者の数は統制できておらず、NUCCはすべて２人の会話であるのに対して、CEJCには２人の会話が３件、３人の会話と４人の会話が２件ずつ含まれている。また、場所についてもNUCCの８件中６件は「大学」か「大学の教室」で行われた会話であるのに対して、CEJCの７件中５件は「施設－飲食店」で行われた会話である。

### ３．２　コレ・ソレ・アレの用法分類

NUCCとCEJCで見られたコレ・ソレ・アレの用例のうち、接続詞(例：ソレデ、ソレニ)や感動詞(例：アレッ？)、慣用表現(例：ソレナリニ、誰ソレ、アレコレ)の一部を構成していると思われるものを除いた数を表１に示す。本稿では、それらを個別に観察し、特に迫田(1998)を参照しつつ用法の再分類を試みた。

**表１　対面会話におけるコレ・ソレ・アレの用例数**

| | コレ | ソレ | アレ |
|---|---|---|---|
| NUCC | 114 | 210 | 152 |
| CEJC | 91 | 160 | 179 |

第一に本稿では、各用例の大分類として「現場指示」「文脈指示」「観念指示」「絶対指示」の４用法を設けた(定義は下記の通り)。これらは概ね迫田(1998)の類似の用法(「現場指示用法」「ア系文脈指示用法」「ソ系文脈指示用法」「コ系文脈指示用法」「観念CS用法」「絶対指示用法」)と重なるが、それぞれの間で連続的な性質を持つ用例の所在を明確にするため、談話内での言及の必要性を新たに基準に含めた[4]。なお、迫田(1998)の分類のうち「単純照応用法」はコレとソレによる「文脈指示」の一部として扱う[5]。

【現場指示】現場にある事物を指し、指示対象への談話内での言及が指示の成立に必要ではない用法

【文脈指示】現場にない事物を指し、指示対象への談話内での言及が指示の成立に必要である用法

【観念指示】現場にない事物(観念)を指し、指示対象への談話内での言及が指示の成立に必要ではない用法

【絶対指示】絶対的な時間を指示するもので、コレカラやコレマデ等の一部となる用法

また、先に本稿の大分類における「絶対指示」に触れると、この用法に該当するのは（1）のようなコレカラや（用例は確認できていないが、）コレマデ・コレヨリ・コレ以降に含まれ、話し手の存在する時間自体を指すコレである。そのようなコレはカラやマデ等と合わせて一語化していると思われるため、独立的な扱いとする。

（1）[6]（就職活動について）
尾形：ああ．鉄道弘済会はね これから（W シツメー｜説明）会なんだよ
青木：これから：っすか？　（CEJC，T006_002）

第二に、「絶対指示」以外の3用法についてそれぞれ下位分類を設けた。まず、「現場指示」の下位分類としては、「具体物を指すか否か」を第一の基準として、「（指すのであれば）指示対象がその具体物か否か」を第二の基準として、「直接指示」「間接指示」「状況指示」の3用法を設けた（定義は下記の通り）。

○現場指示　【直接指示】具体物を指し、また、指示対象がその具体物である用法
　　【間接指示】具体物を指し、また、指示対象がその具体物ではない用法
　　【状況指示】具体物を指さず、現場の状況全体を指す用法

これらのうち「直接指示」は（2）のように現場にある具体物を文字通り直接指示するものである。一方、「間接指示」は同じく具体物を指すが、それは現場にない真の指示対象の代理であるものである。後者は、指示詞に関する文法記述において「間接直示」とも呼ばれてきた用法であり（金水，1999）、たとえば（3）では化粧品がその販売会社に、（4）ではスマートフォンに映された画像が野球の道具に、それぞれ見立てられている。

（2）（F160の化粧品をF045が手に取っている）
F160：私、あんまりね、リップとか選ぶのうまくないんだよね。それピンクすぎる。
F045：あ、すごいきれいな色。
（3）（F045の前にある化粧品について話している）
F045：マックスファクターってどうなの？
F160：何かね、私ね、前、すごいばかにしてたの、絶対やだとか思って。（うん）でもさー。
F045：これって日本の会社？
F160：うん、ん？日本、じゃないよね。　（（2）（3）はNUCC，067）
（4）（「さっちー」のスマートフォンの画面に野球の道具を身に着けた「さっちー」が映っている）
詩織　：なんで そんな全身青で.

さっちー：(W（Dバッ｜バット）(0.988）は：職場の人からもらった.
　詩織　：え.（U それ）全部もらったやつ？.
さっちー：あ．もらって タオルと：リストバンドは（F あの）自分.
（CEJC，K003_012b）

また、残る「状況指示」は特定の具体物というより、会話がなされる場の状況全体を指すものである。たとえば（5）では、「当初は別の予定があった」という会話の前提があり、対比的に「食事をしている今、この状況」がコレで指されている。このような用例は、発話の現場の事象を指す点で「現場指示」的であり、何らかの文脈を要する点で「文脈指示」的であるが、共有される前提や指示対象について会話の中で言及がなくとも（実際、（5）の会話ではない。）聞き手に指示のあり方が伝わることが窺える。従って本稿では、「現場指示」の一部として整理する。

（5）（野球観戦の予定が天候不順で潰れたため、代わりに来たレストランで食事しながら）
さっちー：うま（U い).
　詩織　：おいしい.
さっちー：逆にきょう これでもよかったわ.
　詩織　：だね.　（CEJC，K003_012a）

次に、「文脈指示」の下位分類は、迫田(1998)同様、「ア系文脈指示」「ソ系文脈指示」「コ系文脈指示」の3用法を設けた（定義は下記の通り)。但し、このうち「ア系文脈指示」は内容を変え、（6）のように後方照応の形をとるものに限定した。会話において後方照応のアレは、言い方が定まらない指示対象に触れる際にターンを事前に獲得したり、維持したりする方略として現れるものであり[7]、迫田（1998）では「観念CS用法」に分類されている。一方、対象への言及があってはじめて成立する指示であるため、本稿では「文脈指示」の下位分類と考えることにした。

○文脈指示　【ア系文脈指示】アレによって、後方にある対象を指示する用法
　　【ソ系文脈指示】ソレによって、対象を指示する用法
　　【コ系文脈指示】コレによって、対象を指示する用法

（6）（合奏をすることの意義について）
　徹　：(G まあ｜ま）そこに：(G まあ｜ま％）人間らしさってゆうね.
　大場：そう.
龍之介：うん．まあ（W（D モ）｜もちろん）もちろん：合奏は合奏でさ：(F あの：）
　　指揮者のさ：あれとかさ（0.29）（F あの）考え方とかさ 一人一人の考えとか

もちろんあるんだけど.　　（CEJC，T010_004）

なお、後方照応ではないアレについては一見、前方照応を行うものが多いが、そもそも指示対象への言及がないものも見られる。たとえば（７）は、先行する話題が収束した後、F137によって新たな話題が持ち出された場面である。この用例ではアレの指示対象（「振袖」）に一切の言及がないが、聞き手（F114）は直後に問題なく対象を特定できている。この点で後方照応ではないアレは必ずしも対象への言及を要さないと言えるため、本稿では一括して「観念指示」の下位分類と考える（なお、迫田（1998）は反対に、こちらを「ア系文脈指示用法」に分類している）。

（７）（直前まで獅子座流星群について話していた）
＜間＞
F137：114ちゃん、成人式のあれ着た？
F114：うん。撮ってきたよ。（あたしも）おととい。　　（NUCC，066）

最後に、「観念指示」の下位分類としては、「性質や状態への言及を回避している（ことが聞き手にわかる）かどうか」を基準に、「隠語的観念指示」と「一般観念指示」の２用法を設けた（定義は下記の通り）。

○観念指示　【隠語的観念指示】性質や状態への言及を回避する用法
　　【一般観念指示】観念の中にある知識や対象を指示する用法

両者のうち、「隠語的観念指示」と見なす用例は（８）のように共起する表現や発話展開（特に条件節の使用）から、ネガティブな性質や状態への言及を避けていることが明確であり、仮に指示対象を言語化しても名詞になりにくいアレの用例である。一方、「一般観念指示」は上述の通り後方照応ではないアレが該当するが、そのほか、（９）のような引用節内部のコレとソレも現場の事物を指してはいないことから、明確に「文脈指示」でない限り、この用法と見なす。なお、迫田（1998）の分類上、本稿の「隠語的観念指示」のアレ及び「一般観念指示」のコレとソレはどちらも「観念CS用法」に含まれる。

（８）（旅行の体験について）
富永：（U わたし）．個人的に京都とか行ったりとか：（0.276）しました.
尾形：おー.
青木：おー.
富永：でもちょっと バイト代がそんなにないので（0.657）なかな（L か）（0.104）（L あ％れですけど）.　　（CEJC，T006_002）

（９）（就職先について迷っているF046とF086）

F046：うーん、そうそうそうそうそう。なんかさー、自分何やりたいのって感じなんだけど。

F086：そうー、なんかこう、こう、これはいいなっていうのは結構あるけど、（うんー）１個に絞れない。（NUCC，072）

以上、規定した４つの大分類と計８つの小分類は、図１のようなフローチャートとしてまとめることができる。

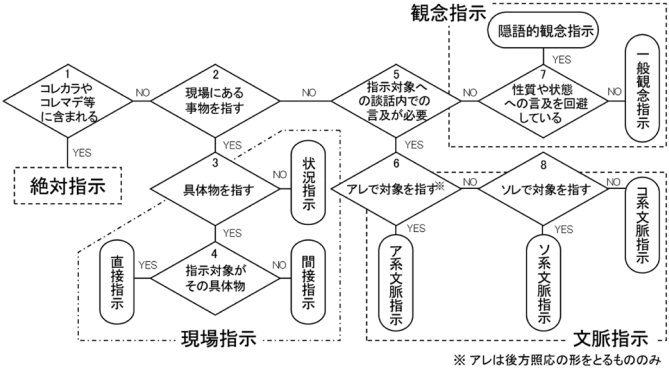


**図１　本稿におけるコレ・ソレ・アレの用法分類**

### ３．３　対面会話における用法別出現傾向

３．２を踏まえ、NUCCとCEJCで見られたコレ・ソレ・アレの用例を実際にいずれかの用法に分類した結果を表２に示す。なお、表２における「割合」は全用例数に占める割合である。同様に、表２も含めてこれ以降の表中及び本文における「調整頻度」は100ターンあたりで換算した用例数を示す。

表２のうち太枠で囲った箇所からわかる通り、特にソレは「ソ系文脈指示」に、アレは「ア系文脈指示」と「一般観念指示」に、それぞれ偏って現れている点で、NUCCとCEJCでは類似の傾向があることが窺える[8]。対してコレは「現場指示」の用法間で割合が異なり、調整頻度も踏まえると、特にCEJCで「間接指示」の用例の増加が見られる。ふたつのコーパスに含まれる会話の収録時期に鑑みて、その要因としてはスマートフォンの画面を他者と一緒に覗く行動の増加も想定されるが、実際にはそのような用例は少数（２例）であった。一方、従来、コは話し手の近くを指す用い方が本質にあるとされるが（金水，1999)、本稿が扱った会話では、収録場所に関しても違いがある（NUCCは主に「大学」か「大学の教室」、CEJCは主に「施設－飲食店」)。この点を踏まえると、コレの出現傾向は寧ろ、話し手の近くの環境の違い（たとえば周囲の物の数や配置）と対応していることが推測される。

次節では、以上のようなコレ・ソレ・アレの現れやすさ（または出現傾向の変わりやすさ）を踏まえつつ、「打ちことば」について検討を行う。

**表２　対面会話におけるコレ・ソレ・アレの用法別出現傾向**

| コレ | 現場指示 | | | | | | 文脈指示 | | 観念指示 | | 絶対指示 | | 判別困難 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 直接指示 | | 間接指示 | | 状況指示 | | コ系文脈指示 | | 一般観念指示 | | | | | |
| | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC |
| 用例数 | 57 | 33 | 6 | 32 | 7 | 5 | 7 | 5 | 25 | 13 | 11 | 3 | 1 | 0 |
| 割合 | 50.0% | 36.3% | 5.3% | 35.2% | 6.1% | 5.5% | 6.1% | 5.5% | 21.9% | 14.3% | 9.6% | 3.3% | 0.9% | 0.0% |
| 調整頻度 | 1.2 | 1.2 | 0.1 | 1.2 | 0.2 | 0.2 | 0.2 | 0.2 | 0.5 | 0.5 | 0.2 | 0.1 | 0.0 | 0.0 |
| ソレ | 現場指示 | | | | | | 文脈指示 | | 文脈指示 | | 判別困難 | | | |
| | 直接指示 | | 間接指示 | | 状況指示 | | ソ系文脈指示 | | 一般観念指示 | | | | | |
| | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | | |
| 用例数 | 13 | 6 | 0 | 1 | 0 | 0 | 191 | 149 | 4 | 4 | 2 | 0 | | |
| 割合 | 6.2% | 3.8% | 0.0% | 0.6% | 0.0% | 0.0% | 91.0% | 93.1% | 1.9% | 2.5% | 1.0% | 0.0% | | |
| 調整頻度 | 0.3 | 0.2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 4.2 | 5.4 | 0.1 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | | |
| アレ | 現場指示 | | | | | | 文脈指示 | | 観念指示 | | | | 判別困難 | |
| | 直接指示 | | 間接指示 | | 状況指示 | | ア系文脈指示 | | 隠語的観念指示 | | 一般観念指示 | | | |
| | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC | NUCC | CEJC |
| 用例数 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 48 | 58 | 1 | 6 | 97 | 113 | 5 | 2 |
| 割合 | 0.7% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 31.6% | 32.4% | 0.7% | 3.4% | 63.8% | 63.1% | 3.3% | 1.1% |
| 調整頻度 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 1.1 | 2.1 | 0.0 | 0.2 | 2.1 | 4.1 | 0.1 | 0.1 |

## ４．携帯メール・LINEにおけるコレ・ソレ・アレ

前節を踏まえ本節では、携帯メール及びLINEにおけるコレ・ソレ・アレの出現傾向を観察する。

### ４．１　対象とする携帯メール・LINEのデータ

「打ちことば」の観察にあたり、本稿では、三宅（2006）で公開されている携帯メールの談話343件（計1920発信／2120ターン[9]）と、筆者が独自に集めたLINEの談話66件（計7963発信／5173ターン）を扱う。前者は2003～2005年に東京の大学生から収集したものであり、後者は2014年５月～2019年１月に東京・千葉・茨城の大学生及び20代前半の社会人から収集したものである。データの提供者以外も含めると両者ともに参加者の出身地には不明な点があるが、共通して東京方言を基調とする発信が交わされ、携帯メールではのべ686人が、LINEではのべ210人が、それぞれ関わっている。携帯メールの談話１件の長さは、平均して３往復程度である。一方、LINEの談話はスマートフォンのスクリーンショットで始発部から20枚程度のやりとりを集めており、66件中27件が３人以上によるものである。なお、前節では明確なゴールがないやりとり（「非タスク」と呼ぶ。）のみ扱ったが、本節の調査対象にはゴールがあるやりとり（「タスク」と呼ぶ。）も含まれている[10]（携帯メールの談話は264件、LINEの談話は26件が「タスク」）。

### ４．２　携帯メール及びLINEにおける用法別出現傾向

携帯メールとLINEで見られたコレ・ソレ・アレの用例のうち、接続詞や感動詞、慣

用表現の一部を構成していると思われるものを除いた数を表３に示す。それらを個別に観察したところ、全用例が前節で示したいずれかの用法に該当することが窺えた。そこで本節では、先に用法別の出現傾向を示し、次に具体例を取り上げる。

**表３　携帯メール・LINEにおけるコレ・ソレ・アレの用例数**

| | コレ | ソレ | アレ |
|---|---|---|---|
| 携帯メール | 32 | 46 | 3 |
| LINE | 76 | 198 | 21 |

各用例を用法ごとに分類した結果は表４の通りである（表中における「割合」は全用例数に占める割合である）。

**表４　携帯メール・LINEおけるコレ・ソレ・アレの用法別出現傾向**

| コレ | 現場指示 | | | | | | 文脈指示 | | 観念指示 | | 絶対指示 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 直接指示 | | 間接指示 | | 状況指示 | | コ系文脈指示 | | 一般観念指示 | | | |
| | メール | LINE | メール | LINE | メール | LINE | メール | LINE | メール | LINE | メール | LINE |
| 用例数 | 0 | 2 | 1 | 34 | 1 | 6 | 6 | 18 | 1 | 3 | 23 | 13 |
| 割合 | 0.0% | 2.6% | 3.1% | 44.7% | 3.1% | 7.9% | 18.8% | 23.7% | 3.1% | 3.9% | 71.9% | 17.1% |
| 調整頻度 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.7 | 0.0 | 0.1 | 0.3 | 0.3 | 0.0 | 0.1 | 1.1 | 0.3 |
| ソレ | 現場指示 | | | | | | 文脈指示 | | 観念指示 | | | |
| | 直接指示 | | 間接指示 | | 状況指示 | | ソ系文脈指示 | | 一般観念指示 | | | |
| | メール | LINE | メール | LINE | メール | LINE | メール | LINE | メール | LINE | | |
| 用例数 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 46 | 196 | 0 | 1 | | |
| 割合 | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.5% | 0.0% | 0.0% | 100.0% | 99.0% | 0.0% | 0.5% | | |
| 調整頻度 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 2.2 | 3.8 | 0.0 | 0.0 | | |
| アレ | 現場指示 | | | | | | 文脈指示 | | 観念指示 | | | |
| | 直接指示 | | 間接指示 | | 状況指示 | | ア系文脈指示 | | 隠語的観念指示 | | 一般観念指示 | |
| | メール | LINE | メール | LINE | メール | LINE | メール | LINE | メール | LINE | メール | LINE |
| 用例数 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 3 | 18 |
| 割合 | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 14.3% | 0.0% | 0.0% | 100.0% | 85.7% |
| 調整頻度 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.3 |

表４のうち太枠で囲った箇所からわかる通り、携帯メールとLINEでも、一）コレは「間接指示」の出現傾向が違うことと、二）ソレは専ら「ソ系文脈指示」に、アレは専ら「ア系文脈指示」（但し、この用法はLINEのみ）と「一般観念指示」に、割合上偏ること、の２点に関して、前節で扱った対面会話と類似の傾向を見出せる。但し、このうち一）に関しては、そもそも参加者同士が非対面であり、物理的な環境が共有されていない点で等質な状況にあると言える「打ちことば」において、なぜそのような違いが生じるのか、という点が注目される。また、二）に関しても、調整頻度の上ではソレ・アレともに携帯メールとLINEで若干の差があり、その背景について一考の余地がある。

そこで以下では、コレ・ソレ・アレそれぞれの用例について、メディアの特性も踏まえつつ分析を行う。

なお、コレについては「絶対指示」の出現傾向も携帯メールとLINEで違いが見られるが、これは前者でデータ全体に占める「タスク」の割合が高く、(10) のように予定に触れる文脈が多いことに基づく問題と思われる。従ってこの用法は詳しく取り上げない。

(10)（談話の開始部で）
A：はぁ〜！授業終了！　今どこいる？これから学食行くけど来ない？
（携帯メール，2004，146）

### 4．3　携帯メール・LINEにおけるコレ

まず、コレに関して検討する。上述の通りコレの用例については、特に「間接指示」の出現傾向に関して違いがあり、携帯メールを基準とすると、LINEで調整頻度の大幅な増加が見られる（携帯メール：0.0／LINE：0.7)。この点を踏まえLINE上の当該用法の用例を詳細に見ると、34例中27例が（11）（12）のように画像を介して真の指示対象を指すものであった。前節で扱った対面会話の「間接指示」では３．２で言及したもののほか、広告や食器等、多様な要素が媒介物を務めていたが、画面上では共有できる内容が限られるLINEでは、画像が主な媒介物となることが窺える。

(11)（談話の開始部で）
A：【Aの子供Cが荒らした部屋の写真】
B：これ全部Cちゃん？笑　（LINE，015）
(12)（Bがアクセサリーを作っていることについて）
A：つくれるんだ！すご！
B：【アクセサリーの写真１】
B：【アクセサリーの写真２】
B：これらも作った　（LINE，022）

一方、携帯メールにおける「間接指示」の唯一の用例は（13）であり、画像が関わるものではなかった。(13) では、コレが含まれる発信自体を媒介物として、真の指示対象「メアド」（＝メールアドレス）が指されていると言える。

(13)（「体育の…」という題名が付いた発信において）
A：時の者だよ〜メールおそくてごめんね〜（＞＿＜）これがメアドだよ〜よろしくね☆
B：ミチエです☆よろしくお願いしまーす（^0^）/
　あ、番号教えてください♪　（携帯メール，2005，82-83）

このような観察を踏まえると、携帯メールとLINEにおける「間接指示」の出現傾向の違いは、画像共有のあり方の違いと深く関わることが窺える。但し、多くのフィーチャーフォンでは2000年代初頭の時点で画像の管理機能が搭載されていたと考えられ、本稿が扱ったデータでも、(14) のように画像の送受信を含むと思われるやりとりが複数見られた[11]。従ってこの問題は、画像を共有できるか否かに基づく問題というより、画像をどのように共有できるかということに基づく問題であると言える。

(14)（BがAの家にいる間に骨折したことについて）
A：折れてましたか。よくウイイレできましたね。とりあえず怪我の治療に専念してください。新学期大丈夫ですか？
B：こんな感じ。わかりづれー！まぁ治ったらパンパンにしてやる！新学期は軽くレイトでスタートするけど。また連絡するわ！　　（携帯メール，2004，114-116）

また、ここで携帯メールとLINEのユーザーインターフェイスを考えると、本稿が対象とした2000年代の携帯メールはフォルダ形式（図２上部）であり、「発信一覧」から「他者の発信」を選び、「自己の返信」を作成する一連の操作が別々の画面で示される表示形式がとられていた。そのため、他者が送った画像はそれを見ながら返信を作成できない点で、作成中の文章（＝画面上の話し手の所在）と近い位置にあるものと知覚されにくかった可能性がある。同様に、自らが送る画像も、あくまで発信全体への添付という形がとられる。従って、作成中の文章におけるコレと添付した画像との距離は送り手にとって必ずしも随意的なものではない。対してLINEでは、（少なくとも2010年代において）「発信一覧」「他者の発信」「自己の返信」がすべて同じ画面で表されるチャット形式（図２下部）が採用されており、別々に送った画像や文章を隣接する形で並べることができた。それゆえ両者の間の知覚上の距離は相対的に縮まると考えられ、付随して近くを指して現れる「間接指示」のコレが増えたものと推測できる。

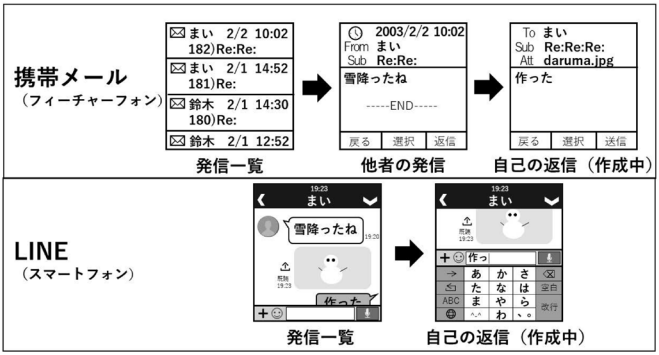


**図２　携帯メールとLINEの返信時のユーザーインターフェイス**

### ４．４　携帯メール・LINEにおけるソレ

次に、ソレに関して検討する。ソレの用例は携帯メール、LINEともに対面会話同様(またはそれ以上に)、「ソ系文脈指示」に偏るが（携帯メール：100.0％／LINE：99.0％)、調整頻度自体を踏まえると、携帯メールとLINEの間では約1.7倍の差が見られる（携帯メール：2.2／LINE：3.8)。これを踏まえ、個々の用例を詳しく見ると、携帯メールでは全用例の30％（46例中14例）が（15）のように話し手自身の発話内の先行文脈を指していたが、LINEではそのような用例は10％に満たなかった（196例中18例)。

（15)（成人式について）
A：成人式よかったよ！！ヤスも来ればよかったのに〜。あの会場でやる高校の同級生はヤスしかいないから、久々に会いたかったよ〜。
B：おめでとう！私はああいう混雑は…。それにまた振袖着るの嫌だったし。雑技団かなんか来たんでしょ？どうだった？それだけはちょっと見てみたかったなぁ。
（携帯メール，2004，20-21）

また、LINEにおける他者の発話内の先行文脈を指すソレでは、（16）のような単純な用例だけでなく、（17）〜（20）のような固定的な表現であると思われる用例も見られた。これらのうち（17)（18）に見られる「それな」「それね」のような表現（以下、ソレX）は（直後に「笑」や「！」を伴うように）単独で相手の意見や願望に同意を示す文として成立する点や、同じくソを含む同意表現ソノトオリやソウダネと違い、直前にソレハが入り込めない（＃ ソレハソレネ）点で一貫した特徴があることが推測される。LINEにおいてこのような表現のバリエーションとしては「それな」(36例)「それね」（８例）「それ」(13例)「それですわ」（１例）が見られ、合計はソレの用例全体の30％（196例中58例）を占めていた。一方、（19)（20）に見られる「それは神」「それはどん底」のような表現（以下、ソレハＰ）はＰに該当する語次第で同意にも不同意にもなることが窺えるが[12]、共通してソレハがターン冒頭に位置し、続くＰ一語で文が終わる点で形式的な一貫性がある。LINEでそのような用例は26例見られ、全用例の13％を占めていた。

（16)（サークルの友人の様子が変なことについて）
A：【サークル名】は闇サークル
B：さすがだ
A：病みサークル
A：だな
B：それもあるね　（LINE，003）
（17)（共通の友人が母校で働いていることを聞いて）
A：【学校名】いきたいなぁひさしぶりに
A：先生たちと話したい！

B：それな笑　（LINE，020）

（18）（旅行の計画について）

A：おひるにつくかんじ

B：だねー

C：でも、芦ノ湖いきたーい

B：それねー！　（LINE，051）

（19）（バレーボールの練習について）

A：２回でフローターサーブを打てるようになっていてくれ

B：それは神　（LINE，001）

（20）（所属サークルの先輩の様子について）

C：ゴミが友達

C：とか言われたら困るよね

A：【スタンプ】

B：それはどん底ww　（LINE，064）

なお、携帯メールではソレハＰと捉え得る用例が１例見られたが（(21)）、ソレＸの用例はなかった。また、LINE上でソレＸとソレハＰを除くと、残る「ソ系文脈指示」の調整頻度は２．２となり、携帯メールの「ソ系文脈指示」の調整頻度（２．２）と重なる。

（21）（お出かけについて）

A：（前略）たまにはパァーっとお出かけしたい…昨日は雨だったしな💧

B：（前略）んじゃ、ぱーっと関東に遊びに…

A：（前略）それは無理！時間とマネーがないもん_ト￣●|||ガクリ・・・（後略）

（携帯メール，2004，540-542）

ふたつの表現のうち、特にソレＸについては宍戸（2014）で若者ことば「それな」に関する質問紙調査が行われており、少なくとも関東では2010年代以降普及したことが示されている。本稿の観察はまず、同論を裏付けるものと言えるが、一方、前節で扱った対面会話のうち特にCEJCの会話を振り返ると、そこでのソレＸの用例は、(22)をはじめ「ソ系文脈指示」の用例148中４例しか見られなかった[13]。このことから、ソレＸは話しことばで現れるものが「打ちことば」にも現れたというより、「打ちことば」で現れるものが話しことばでも現れるようになった表現であることが示唆される。

（22）（高校時代の友人に会いにくいことについて）

さっちー：あー．どこだったら（0.124）会えんの？（W（D ア）｜あ）会いたいってゆってる割に（Lにはさ）（L）（L（F あの：））（L）限定：．

詩織　：それな．あの人怠慢だからさ．（後略）　（CEJC，K003_012b）

特に、ソレX、ソレハPともに情報の受け手の反応として現れること（即ち順番交替を前提とすること）と、2010年代（2012年以降）の若年層日本語話者の電子メディア利用において最も利用者率の高いコミュニケーション手段はLINEであること（総務省情報通信政策研究所，2021）を考慮すると、両表現の普及にはLINEの「打ちことば」が深く関与したことが推測される。また、同じく順番交替がなされる携帯メールではソレXやソレハPが見られにくいことを踏まえ、LINEでなぜそのような表現が現れたのか、という点に積極的な理由を与えれば、この点も先に触れたコレ同様、表示形式の変更と無縁ではないものと思われる。即ちチャット形式では、他者の発信と自己の発信を隣接させられる点で個々の反応が何に対する反応かわかりやすいことから、フォルダ形式よりも細やかな反応を基調とするやりとりを展開しやすくなったものと考えられる。

### 4．5　携帯メール・LINEにおけるアレ

最後に、アレに関して検討する。アレの用例は携帯メール・LINEともに限られるが、各用法の中で「一般観念指示」が最も多い（携帯メール：100.0％／LINE：85.7％）点は前節で扱った対面会話と重なる。また、特にLINEではそのほか、（23）のように「ア系文脈指示」の用例も一部見られた。（23）はA、B、Cを中心とする計5人がチーム名の候補を挙げている場面である。この用例においてBの発話中のアレは、指示対象「ジャイアンツ」よりも先に現れている。

（23）（イベントのチーム名を決めようとしている）
A：顔ひらた族
B：俺だけだわ
C：顔長族
B：あれは？
A：メガネまんず
B：オレンジのユニフォーム着て
B：ジャイアンツ
B：っていうのはどう？　（LINE，055）

先述の通り、会話において後方照応のアレは言い方が定まらない指示対象に関して話すターンを獲得したり、維持したりする方略となるが、特に対面会話でそのようなアレが頻出する背後には、同期的なやりとりであるため、何も言わなければターンを譲ったことになる問題があると言える。一方、LINE上の同じ用法の存在は「非同期・非対面」（田中，2014）のやりとりがなされるはずのLINEでも場合によっては同様のターンの維持が意図されることを示唆する。その要因としては（23）のように1対多のやりとりも行えるため、ターンの管理上、競合する相手が増え得ることや、「既読表示」[14]により

自らが送ろうとしている内容を他者がすぐに確認できるか窺えることを想定できる。

また、携帯メール、LINEともに用例が見られる「一般観念指示」では、携帯メールの全例（３例）が（24）のように、LINEの18例中16例が（25）のように、それぞれ受け手と共有する記憶内の対象を指していた。両者におけるそのようなアレの現れ方は、３節で触れた石黒（2012）が指摘する対面会話におけるアの現れ方と重なる。但し、携帯メールとLINEでは調整頻度に若干の違いがある（携帯メール：0.1／LINE：0.3）ことを踏まえると、相対的に「一般観念指示」のアレが多いLINEの方が対面会話に近いやりとりが展開されることが示唆される。

（24）（グローブについて）
A：あのね聞きたいんだけど，サークルで使ってるグローブあるでしょ??　あれって冬しか売ってないの??
B：売ってるよ！　（携帯メール，2003，195-196）
（25）（体育館の利用に関する会議の告知について）
A：調整会議の連絡って携帯に来ないの？
B：わかんないけどいつも紙で貼ってあるよね
B：あとライセンとこの掲示板とか
A：あれをいつもチェックしろと？　（LINE，035）

従来、文脈指示的（即ち本稿における「一般観念指示」的）なアには、迫田（1998）が「ア系文脈指示用法」を「聞き手との共有体験・知識を指す用法」と定める通り、聞き手の知識に依存して現れる側面があることが論じられてきた（久野，1973）。一方、このことは話し手が聞き手の知識状態を十分に判断できない場合、アが現れにくくなることも意味する（実際、石黒（2012）に従えば、聞き手の知識を想定し難い独話ではアが現れにくい）。これを踏まえ携帯メールとLINEにおける「一般観念指示」のアレの出現傾向の違いを論じると、同じく談話参加者が離れた場所にいる両者でも、やりとりの中で他者の知識を窺いやすい（と参加者が考える）度合いに若干の差がある可能性を見いだせる。また、このような推測が確かならば、その背景には「ア系文脈指示」同様、「既読表示」によって実際に受け手の様子を窺いながら話せることや、ソレの分析で論じた通り、自己の発信と他者の発信を隣接させられる表示形式によって受け手の細やかな反応を見込んで発話を展開しやすいことがあるものと考えられる。

## ５．まとめ

以上、本稿では、コレ・ソレ・アレの３形式に関して対面会話における現れ方と携帯メール・LINEにおける現れ方を観察した。対面会話の話しことばと比べて、打つ者と読む者が「非同期・非対面」（田中，2014）の「打ちことば」では、共有可能な情報が限られることから、指示詞の使用にも自ずと制限があると言える。一方、「間接指示」

のコレや「ア系文脈指示」及び「一般観念指示」のアレの観察から、そのような制限も一様ではなく、LINEでは携帯メールより対面会話に近い言語使用が展開され得ることがわかった。本稿はその背景に、表示形式や「既読表示」の有無といった機能的特性の違いがあることを述べた。

また、上記のような「打ちことば」が話しことばに近づく言語使用の変化の一方で、「文脈指示」のソレの観察からは話しことばが「打ちことば」に近づく逆向きの変化もあることが窺える。但し、ここでソレXとソレハPがLINEで多い要因に触れれば、これについても打つ者と読む者が同じ場にいないことが重要な意味を持つ可能性がある。たとえば耳馴染みのない新たな表現の使用には、常にある種演技的な側面があると言えるが、音声に限らず表情や身振り等、様々な要素が情報を伝え得る環境と比べて、文字だけで情報伝達できる環境では、よりそのような演技もしやすくなることが推測される。以上の論に基づけば、CEJCにおけるソレXの僅かな用例は、繰り返し演技がなされることで日常の言語使用に新たな表現が定着する二次的変化の事例として解釈できる。

このように新たなメディアのことばには、機能的な特性に規定される側面がある一方で、既存の話し言葉を左右する側面もあると言える。日本語使用の変化を捉える上で、電子メディアのことばは今後ともますます重要な資料となっていくだろう。

## 注

1．本稿では「レジスター」について、特定の場面や集団で使用される言語変種を指し、「相手や目的などによって発音、語彙、文法が使い分けられる」（朝日，2015）特徴を持つものと考える。

2．ターンはNUCCを基準に数えた。具体的には、NUCCであいづち相当の発話がターンとして記述されていないことを踏まえ、CEJCでも明確にあいづちと思われる発話を除いた上、連続する同一話者の発話をまとめて１ターンと見なした（但し、NUCCでも一部、質問に対する応答等、あいづちと捉え難い発話があいづちとして記述されていたため、会話相手の後続する反応から明確なものは修正した）。

3．NUCCとCEJCでⅢ）の条件を設けたのは、前者が雑談を収めるコーパスであることによる。

4．談話内での言及（即ち言語化された文脈）の必要性を基準とする考え方は談話管理理論の立場から指示詞を捉える堤（2012）に拠る。なお、迫田（1998）の分類と分けるため、本稿の分類は末尾に「用法」を付けない。

5．迫田（1998）が「単純照応用法」として想定するのは主に「これ笑える話なんだけど」のような話題の前置きに現れるコと「安い物があったら、それを買おう」のような仮定的な文脈で現れるソである。但し、前者は後続する「話」への言及なしに成立しない表現であり、後者は先行する仮定なしに成立しない表現である点で、本稿の定義上はともに「文脈指示」と捉えられる。

6．対面会話の用例はコーパスの書き起こしデータに基づくが、紙幅の都合で同一話者の１ターン内の改行を無視している。なお、対面会話の用例における話者記号右の「：」はターンを示し、後述の携帯メールとLINEの用例における同じ位置の「：」は発信を示す。

7．会話分析では、そのような方略として、より具体的にはことば探しを行う方略（Hayashi, 2003）や、「質問」「告知」等、行為のあり方の予告を行う方略（林，2008）があることが指摘されている。

8．但し、調整頻度を踏まえると、アレは「ア系文脈指示」「一般観念指示」ともにCEJCでNUCCの２倍多い。その理由は定かではないが、少なくとも「ア系文脈指示」の増加に関しては、甲）３．２で述べた通り、この用法のアレがターンの管理に資するものであること、乙）音声会話では基本的に一度に一人しか話せないため、ターンの管理の難易度が参加者の数に影響されること、丙）CEJCの会話の方がNUCCより参加者が多いこと、の３点から説明できる可能性がある。

9．携帯メールとLINEではターンを数える際、同一話者が同一の話題に言及する範囲に基づいて数えた。詳しくは、落合（2019）を参照されたい。
10．具体的な分け方として、各談話の観察から勧誘や依頼、待ち合わせ場所の決定等、何らかの課題解決を目当てにはじめられたか、または同様のやりとりが談話の途中で挿入され、ターン数の上で全体の１割を超えるものを「タスク」に分類し、そうでないものを「非タスク」に分類した。
11．携帯メールの画像添付サービスの開始は概ね2001～2002年である（落合，2021）。なお、三宅（2006）では、画像添付に関する情報は公開されていない。
12．たとえば（19）は「そんなことができたら神様のようにすごい」の意と考えられ、実質的に不同意を示している。なお、本稿の観察でソレハPのPは「ない」「ゴミ」「絶望」等、多岐に亘る様子が見られたが、基本的に名詞か形容詞に限られることを想定している。
13．NUCCではソレX、ソレハPともに用例が見られなかった。また、CEJCでもソレハPの用例はなかった。
14．自らの発信が他者の端末で開かれたことを示す機能。3人以上のやりとりでは、何人が開いたかも示される。

## 参考文献


朝日祥之（2015）「方言」斎藤純男・田口善久・西村義樹（編）『明解言語学辞典』pp.206-207, 三省堂

石黒圭（2012）「談話の『場』によるコ系・ソ系・ア系の指示詞の使い分け」『表現研究，』96, pp.3-12.

落合哉人（2019）「LINEテキストチャットにおける分析単位の規定と接続表現の使用傾向」『筑波日本語研究』23, pp.83-112.

落合哉人（2021）「『打ちことば』の基盤的研究」筑波大学大学院博士論文

金水敏（1999）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6-4, pp.67-91.

久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉（2019）「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版 コーパスの設計と特徴」国立国語研究所日常会話コーパス報告書３（https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/report/report03.pdf）〈2022年２月20日閲覧〉

迫田久美子（1998）『中間言語研究：日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』渓水社

迫田久美子（2001）「第一言語と第二言語の習得過程：対話調査による指示詞コ・ソ・アの習得」南雅彦・アラム佐々木幸子（編）『言語学と日本語教育Ⅱ』pp.253-269, くろしお出版

佐竹秀雄（2005）「メール文体とそれを支えるもの」橋本良明（編）『講座社会言語科学２　メディア』pp.56-68, ひつじ書房

宍戸彩花（2014）．若年層流行語「それな」の方言性と使用実態　関西大学文学部卒業論文<http://hougen.sakura.ne.jp/hidaka/kenkyu/zemi/shishido.pdf>（2022年２月20日）

総務省情報通信政策研究所（2021）「令和２年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」（https://www.soumu.go.jp/main_content/000765258.pdf）〈2022年２月20日閲覧〉

田中弥生・柏野和佳子・角田ゆかり・伝康晴・小磯花絵（2018）「『日本語日常会話コーパス』の構築：会話収録法に着目して」『国立国語研究所論集』14, pp.275-292.

田中ゆかり（2014）「ヴァーチャル方言の３用法：『打ちことば』を例として」石黒圭・橋本行洋（編）『話し言葉と書き言葉の接点』pp.37-55, ひつじ書房

堤良一（2012）『現代日本語指示詞の総合的研究』ココ出版

林誠（2008）「相互行為資源としての投射と文法：指示詞『あれ』の行為投射用法をめぐって」『社会言語科学』10-2, pp.16-28.

藤村逸子・大曽美恵子・大島ディヴィッド義和（2011）「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏（編）『言語研究の技法：データの収集と分析』pp.43-72, ひつじ書房

三宅和子（2005）「携帯メールの話しことばと書きことば：電子メディア時代のヴィジュアルコミュニケーション」三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編『メディアとことば ２』pp.234-261, ひつじ書房

三宅和子（2006）「携帯メール分析共有データ2003年度版、2004年度版、2005年度版」平成15年度～17年度科学研究費助成事業 基盤研究（C）研究成果報告書『携帯電話利用が若者の言語行動と対人関係に

およぼす影響に関する調査・研究』（代表：三宅和子、課題番号：15520271），pp.67-145.
Hayashi, Makoto（2003）Language and the body as resources for collaborative action: A study of word searches in Japanese conversation. *Research on Language and Social Interaction,* 36, 109-141.

（おちあい　かなと　東京福祉大学）